

関西学院の

これから。



井上 琢智（関西学院大学学長）
1946年京都府生まれ。1970年関西学院大学経済学部卒業。1972年関西学院大学大学院修士課程終了。1975年同大学院博士課程単位取得。1985年関西学院大学経済学部助教授に就任し、1988年に教授、1998年に経済学部長に就任。図書館長や副学長、学院史編集室長などを経て、2011年4月から現職に。

今年4月、関西学院大学の学長に就任された井上琢智学長。2014年の創立125周年を迎えるにあたり、関西学院は真の世界市民を育成する学びの場であり続けることを本分に掲げており、新学長にも学内外から大きな期待が寄せられています。
今回は井上学長にインタビューを行い、学長としての抱負や関西学院大学の未来に対するビジョンについて語っていただきました。

井上学長は、経済学部長、副学長、図書館長、学院史編集室長など数々の要職をご経験されました。その間にお感じになったことなどをお聞かせください。

私は1966年（昭和41年）経済学部に入りました。入学してから2年間はクラブ活動（茶道部）ばかりで、これから経済学を勉強したいと思っていた時に大学「闘争」が起きました。レポート試験が行われたため単位を修得できたのですが、逆に本格的に勉強できなくなりました。
紛争の後、大学「正常化」運動のために改革推進日（土曜日）が設けられ、教員と学生が真剣に新しい組織運営を求めて議論をしました。このときの経験を通して、

学校はやはり教員と学生、そして職員とで維持・運営されるべきだと思ってきました。これら三者が、そして今となっては同窓を加えた四者が、関学を支えているという意識を持つことが重要だと思えるようになりました。役割は違うにせよ、学ぶ者として「真実」や「真理」の前では皆が平等なのです。おそらくこれが本学の「新基本構想」でうたわれている「ラーニングコミュニティ」の意味だろうと私は理解しています。

など周囲から無理やり学んでいたのであれば、大学では学生自身が自らの意志で学ぶことが重要です。他方、教師もいつも「真実」や「真理」の前に謙虚で学び続けるという姿勢、これこそが「研究に基づく教育」を支えるものなのです。このような「ラーニングコミュニティ」の実現のための組織作りこそ学長の役割だと思っています。研究と教育は密接に結びついています。研究に基づかない教育は大学の場合ありえないと思っています。

学長として抱負をお聞かせください。
このような「ラーニングコミュニティ」を実現するためには、以前のように偉い専門家である先生が学生の尻を叩いて教えこむのではなく、学生さん一人ひとりのタレントを発見して、そのタレントを伸ばすために教職員が、そして同窓がお手伝いするというあり方を実現することが大切です。そのためには、学生の皆さんには入学式の時にも言いましたが、高校までの勉強が親



―新中期計画進捗報告が作成されました。新基本構想を実行する為に今後、本学で取り組むべきことは何でしょうか。6つのビジョンがあると聞いているのですが。
6つのビジョンとは「KG学士力の高い質を保証する」、「関学らしい研究」で世界の拠点となる、「地域・産業界・国際社会との連携を強化する」、「多文化が共生する国際性豊かなキャンパスを実現する」、「一貫教育と総合学園構想を推進する」であり、最後のビジョンがこれら5つのビジョンを実現するために必要な「進化を加速させるマネジメントを確立する」ことです。これらに順位はないのですが、研究に基づいた教育機関としての関西学院大学がまず実現しなければならぬのは「学士力」とそれを支える「研究」です。他の3点はそれをより豊かに実現するための方法、または結果として生み出されるものです。従って創立125周年記念事業はこれらのビジョンを実現するための一つの重要な手段であるという観点から実行する必要があると思います。

―評価では実施計画に移ったのが79パーセント、素案のまま実施計画に移っていないのが21パーセントと書いてますね。



制度の設置が100パーセントとなっているのは、その制度が作られればそれで完成ですが、重要なのは、その制度の設置によって期待される成果があらわれるのは、さわめて長い時間が必要だということですが。たとえば、高等教育推進センター設置や新たな人事制度は実現していますが、その成果があらわれるには長い時間が必要なのです。また、新制度自体に予想もしないバグが見つかったり、劣化したりしますから、常に制度改善が必要なのです。まずは実施計画を実現することが重要ですが、その成果があらわれるまでは時間が必要ですから、長い目で見ていく必要があると思っています。その点では、二貫教育はさらに長い時間をかけてその成果を見守る必要があると思います。本来の成果は、新たな二貫教育制度で生まれ育った多くの学生が、卒業時だけでなく、極端な場合、その死にあたって「関学の二貫教育は良かった」と評価した際にはじめて検証できるものだと思います。

—現役学生に期待すること、伝えたいことは何でしょうか。
 —頑張つて自主的に学んで下さいということ、そして自分のライフデザインを作成してくださいということ。今田寛元学長の「。からへ」という言葉がそのことをよく言い表していると思います。自らが「疑問」を抱き、自らの「学び」でそれを「感動」に変える、そのような「学び」が重要です。疑問を抱くところが、あらゆる「学び」の原点なのです。それが「真実」「真理」への第一歩になります。疑問を



経営的な視点からどれくらいの学生数が適切かということは、私の答える問題ではありません。ただ2学部の新設、聖和大学との合併の際に副学長をしていましたから、結果的に規模拡大に関与したことになります。その際、問題になったのは以前のような1万6千人規模の大学だとコストパフォーマンスが悪いということでした。その解消のために法人から提案があり、平松学長の二期目に合意がなされ、大学もその提案を受け入れました。教育学部の新設は計画外だったと思いますが、現時点では適切な規模になったのではないかと思います。

持つて欲しいですね。すぐに納得せず、問い続けて下さいということです。

—そういう基礎学力もありますし、専門性を生かして就職する進路なんかもありますけれども、先生として、これを専門にして生涯何に進みなさいとか、何かございますか？

ともかく今何がやりたいか、選択し、決心していただきたいですね。それが自分の専門性になると思うのです。決心をしないと人間は進めないのです。ただし、それはいつでも変えられる決心でなければなりません。ひとまず決心し、徹底的に努力をして、それでもダメだと思つたらぱつとやめる。「可能性を信じ、挑戦する勇氣」をもって絶えず「トライ&エラー」を繰り返して下さい。子どもの頃は皆そのようにしているのです。「人生を上手に生きられるだろうか」といった邪念が入ると迷つてしまいます。子どもはそのような判断はしませんね。面白いと感じることを一生懸命やって、ダメだったらすぐ諦めて、新たに面白いもの(新たな専門性)を見つけて行動しているのです。そのことを今一度思い出して下さい。

ただ、コストパフォーマンスが前提にはなりません。教育の質がもつとも重要な問題となります。他方では関学らしさが薄れてしまうのではないかと心配しています。ですから、現在の規模のもつとで、いかにして関学らしい教育の実質化を実現させるかが課題だろうと思います。

—東北にもボランティアに行つておられるのですか？

—そうです。本学の学生の中には、震災が起きた翌日の12日にはすでに行つていたものもいます。これは関東大震災からの関学の伝統であり、スクール・モットーの体現だと思つています。ボランティア活動だけで単位を修得できるという仕組みは関学らしいボランティアの理念とは異なるということ、この考えは採用しませんでした。関学にはすでにボランティアや災害復興関連科目が8科目ありますので、単位を伴わないボランティア活動を推奨しました。その代わり、ボランティア活動に参加した学生に対してはできるだけご考慮ください。と先生方に言つています。災害復興制度研究所も大きな力となつており、その活動は社会的にも高く評価されています。



—学生時代に勉強して能力をつけることに関してはどうにお考えでしょうか。

「覚える」というのが重要なのではなく、解答を導き出すそのプロセスが重要だと思つています。受験勉強ではそれで良かったのかも知れませんが。しかしそれは本当の「学び」ではないのです。どうしてその解答が出てきたのか、そのプロセスを見ることを大切にしたいと思つています。問題が変わつても解答のプロセスは生かされますから。たとえば幾何学には「公理」「定理」があり、そして「問題」があつて「証明」します。



ていますが、同窓会活動のあり方やお感じになったこと(同窓生のイメージ)、同窓生へのメッセージなどをお願いします。

同窓会では必ず関学の知名度をもっと高めて欲しいと言われます。そのことはもちろん重要ですので大学の努力が必要だと思います。しかしその一方で、見方を変えていただきたい、複眼的なものの見方をしていたいただきたいという側面もあります。

たとえば関学は、日本のキリスト教界では最も知名度が高い大学ですね。学界における研究成果の発表などの場面でも、関学の地位は確固たるものがあります。

また、関西の実業界でも関学の地位は今なおそれなりの知名度を保持していると思います。問題は、知名度が低いといわれる場合、どの分野で知名度が低いかを明らかにし、分析し、個別の対策をたてることなどではないでしょうか。そして、この問題の解決には、学生、教員、職員、同窓の四つが一体にならないと思っております。特にこれからの少子化の中で関学がただ単純に生き残るだけではなく、やはり存在意義のある学校にしていかなければなりません。我々はそのために努力していかなければならないと思います。

—映画「阪急電車」は観られましたか？
正門なども出てきましたけども。

試写会で観ました。このあいだ4大学の学長から羨ましがられて、次に関関同立が出る映画を作ろうという話になりました(笑)。だれが脚本書くんだと(笑)。やはりそれだけこの映画の評判はシヨクだったようです。あれは関学から持ち込んだ企画ではありませんでした。どこがと問われれば答えるのは困難ですが、どことなく関学らしさが滲み出た秀作であったと思います。またご覧になられていない方はぜひご覧下さい。

—創設者のランバスにスポットをあてたようなドラマが作れないかという話もあるようです。

ドキュメンタリーなら作れなくはないと思います。NHKに作ってもらって再放送してもらえばいいですね。話の中心はおそらく神戸の居留地だと思います。大阪の川口居留地と神戸居留地の中に生きる外国人のエピソードの中にランバス一家も登場します。ネタはたくさんあります。たとえばE・H・ハンターなども出てくるでしょう。でも主役を誰にするかは難しいですね。

定理を証明するには何通りもの解法があります。しかし、教科書には模範解答は一つしか書かれていないことが多いです。その解法と違う方法をいかに発見するかということに喜びを感じて下さい。複眼的な見方・解法が重要なのです。そして、人と違う解法の発見こそ自分のオリジナリティの獲得につながると信じています。

—同窓会支部総会などにご出席いただきたい

—学院(大学)と同窓会のつながりについてお話しください。どういうものが理想的ですか？

同窓会活動は、一部を除いて国公立が弱いといわれていますが、それは当然だと思います。明確で独自性が強い建学の精神がないからです。さらに、多くの国公立は合併によって作られています。同窓会組織は統一されてこなかったのです。そのような中で、明確な建学の精神をもつ関学でも、一時期は学校がいくつかに分かれていたため、同窓会が別々になっていた時代があります。しかし今や、初等部から短大、大学、大学院まで同窓会はひとつになり、一本化されています。そういうことが重要なのです。そして、同窓会という組織はあまり巨大な「プレッシャーグループ」になり過ぎないことが大切だと思います。同窓会ではできれば大学を含む学校法人関西学院を「見守る」という立場をとっていただきたい。そして、道を間違えそうになった際には強力なアドバイスをしてくれる存在であってほしいと願っています。その点では、現在の関西学院と同窓会との関係については、私は今が一番いい関係が保たれている時期だと思います。

また、学院(大学)と同窓会は母校支援という形で良好な関係が保たれていると

思います。今年、新しくスタートした同窓会のインターンやUターン学生に対する就職支援活動、短期留学生のホームステイ先紹介は学生・留学生の希望に添えるものと期待しています。今後ともよろしくお願ひします。

—最後に、東北の震災に向けて、学長から何かコメントをお願いします。

被災者であった人が、今回被災を受けた地域でボランティアを行うのが一番良いと思います。今どのようなことが求められているのか、わかりますから。関学では多くの学生がボランティアに登録し、すごい組織力で行動しました。

『激震—その時大学人は—』という本を存知でしょうか？これは阪神淡路大震災を受けた関西学院の記録です。この内容は関学のHPで今年の3月20日過ぎに掲載されています。これを見た明治大学の方もこのような記録を作ろうとされています。このような記録を残すことも大学の使命だという評価でした。今まで、ここまできちとした記録を公開しているのは関学くらいです。

この記録には、当時の関学での迅速な対応の記録が残されていますが、学生・教職

員の力はすごいものだということがよく分かっていただけだと思います。この震災を機に関西学院では危機管理に対する意識が高まりました。その意味では、この関学の経験をこの本だけではなく、災害復興制度研究所の研究成果からもぜひ学んでいただきたいと思っています。

そして、それ以上に重要なことがあります。それは被災者の「心」の大切さを認識していただきたいということです。「見えなものの」復旧・復興は、「見えるもの」の復興より難しいものです。このことを心に留めておいていただきたいと思っています。そのため支援に関西学院は今後とも行っていききたいと思います。

—本日は貴重な御意見やアドバイスをいただきありがとうございます。

